

藤原照子

句集
余韻

藤原照子さんは「沖」創刊以来の人。第一句集『秋螢』以後十五年間に大切な人を二人喪った。〈ふたりゐてひとりの夜長たのしめり〉と〈ふたたびはかなはぬ登山靴二足〉とに、夫君の生前と歿後との落差を思う。〔師との旅のいくたび烏雲に〕は師登四郎を偲んでの作である。著者自身は元気で旅吟・海外詠も多い。

林 翔

水餅のひそと元号うつりけり

帷子の辻で乗継ぐ雪しぐれ

雪国の駅あたたかき待ち時間

襦袢替ふ家の内見え雁木みち

おぼろかなまつすぐ駅へ下戸同士

花過ぎのひつそりと絵馬焚かれけり

一室を日焼一家に領さるる

目に見えし薬効を怖づ夏の果

火口湖にきのふの野分のこりをり

折合へぬ話で帰す夜の霧

唱歌出て世代のおなじ峡もみぢ

出入りの分だけ空けて柿すだれ

着陸へ一気に殖ゆる師走の灯

産土の灯守り代々寒造

雪折の数にたぢろぐ作務はじめ

赤飯のささげのはじけ入園す

手
抜
か
り
の
枝
の
天
突
く
梨
の
花

遠
巻
き
に
黒
潮
な
が
れ
端
午
か
な

自家用の鮎残り火に焼かれけり

浮草の息ととのふる雨あがり

六月の楡と吹かれて再会す

踊る子のみない同士で見てをりぬ

炉
端
よ
り
席
の
埋
り
し
と
ろ
ろ
汁

七
五
三
鯛
の
目
玉
を
ね
だ
り
け
り

大枯木よか羽毛降りなにもみず

雪囲ひ本家てふ楯通しけり

空
櫓
の
救
助
隊
山
下
り
て
来
し

臘
梅
や
曲
げ
物
に
湯
の
力
借
る

五十三次なごりの松も霞みけり

流水を見るだぶだぶの借着なり

人脈に淡くつながりさくら狩

同舟に僧万緑の峡下り

暑氣払死なぬつもり顔そろふ

日に幾度ノルウエーの虹峠越え

かたかごは森の踊り子風を待つ

声かけて良夜の仏間開け放つ

人拒むとも誘ふとも霧樹海

山霧へ己が深息加へけり

ボージョレ・ヌーボーさういへば新嘗祭

墓洗ふ恋の余韻のなくはなし



句集 余韻 よいん

発行 平成十六年四月三日

著者 藤原照子

発行者 田口恵司

発行所 株式会社角川書店

〒一〇二八一七七

東京都千代田区富士見二一三三
電話〇三―五二二―一五二五(編集)

編集制作 角川文化振興財団

印刷所 株式会社熊谷印刷

製本所 株式会社鈴木製本所

©Teruko Fujiwara 2004 Printed in Japan
ISBN4-04-876208-7 C0092